「時間の外にある都市」

『山にのぼりて告げよ』におけるハーレムと教会

永尾　悟

ジェイムズ・ボールドウィンの『山にのぼりて告げよ』は、1930 年代のハーレムに生きる黒人少年ジョン・グライムズの通過儀礼にまつわる物語である。本発表では、ハーレムの家族や教会の中で自分の居場所を見出そうと葛藤するジョンの物語を通して、ニューヨークの都市空間における黒人存在を、アメリカひいては西洋全体の文脈から捉えようとするボールウィンの思想を考察した。そして、ジョンが宗教的覚醒を経験するハーレムの教会が、黒人たちの生命を脅かす危険な都市の中の「安全な空間」になりうるのかについて検討した。

都市空間における黒人と「西洋の私生児」

『山にのぼりて告げよ』は、ジョンの 14 歳の誕生日からその翌朝までをたどる物語で、作品前半では、彼がミッドタウンに向かう場面が描かれる。セントラルパークの丘から摩天楼を望み、五番街からブロードウェイを歩く彼は、南部の先祖たちが憧れた「この輝く街」の中に「頭から飛び込みたい」という衝動に駆られるが、「そこではいかによそ者であるか」（27）を実感する。高級店が立ち並ぶ五番街の通りに黒人の居場所はなく、「彼にあるのは裏口、そして暗い階段、そして台所か地下室」（31）という都市の公共圏の裏側である。

都市研究の古典『都市のイメージ』において、ケヴィン・リンチは、都市の外観を通して個人が認識するイメージには一定の共通性があると指摘する。「たいてい、都市に対する私たちの認識は」、「部分的で断片的で、他の関心事と混ざり合っている」（2）が、「都市の居住者の大多数によって抱かれる共通の心象、つまり『パブリック・イメージ』と呼びうるもの」が形成されると述べる（リンチ 7）。摩天楼、五番街、公立図書館のライオンといったニューヨークの「パブリック・イメージ」を構成する諸要素を幼い頃から見てきたジョンだが、そのイメージの形成には関与していない。ジョンは、街路に降り立てば「見たこともない素晴らしいものを見せてくれる」（27）という希望を抱きつつも、煌びやかな都市のイメージを具現化することができない。

この場面は、ニューヨークの都市空間にとどまらず、西洋全体においてアメリカ黒人がいかに位置づけられているかというボールドウィンの問題意識と結びつくものである。作品出版の 3 年前に発表されたエッセイ「自伝的ノート」において、彼は自らを「ある種の西洋の私生児」だと直接的な表現で喩え、エンパイア・ステート・ビルを見るときに黒人として抱く疎外感は、シェイクスピアやバッハ、レンブラントが築いた西洋の芸術的伝統に対する感覚と同様であると述べる（6）。ボールドウィンは、エッセイやインタビューにおいて、実の父親を知らないことを繰り返し語るが、「私生児」であることは、彼の個人的な背景にとどまらず、西洋全体におけるアメリカ黒人存在のありようを含意するものへと拡大していったのである。

「安全な空間」としてのハーレムの教会

『山にのぼりて告げよ』のジョンと同じ 14 歳の頃を回想したエッセイ「十字架のもとで」において、ボールドウィンは、自分に残された「可能性」は「街路の惨めな連中の一人になること」（301）だったと振り返る。黒人少年を待ち受ける苛烈な現実に対する「あらゆる恐怖心が世界と私の間に壁のように立ちはだかり、私を教会に向かわせた」（303）と語り、教会がその恐怖から解放される避難所であり、「神」と「安全」は「同義語」だと彼は信じていたのである（「十字架のもとで」 296-303）。

マイグレーション・ナラティブ研究の第一人者ファラ・ジャスミン・グリフィンは、敵対的な都市空間に生きる黒人たちが「安全な空間」を見出そうとする場面が多くの黒人作家によって描かれてきたと指摘する。グリフィンが定義する「安全な空間」とは、教会や家といった物理的なものに限らず、口承文化、記憶、夢などの比喩的なものも含まれており（111）、現実の都市の時間の流れとは異なった歴史や記憶が喚起される「安全な時間」でもあるという（111）。このように、彼らが見出す「安全な空間」の中で連帯することが敵対的な都市において傷ついた心を癒やし、現実を耐え忍び、そして生き抜くための活力につながるという。さらに、南部やアフリカの先祖たちとのルーツを確認できるこの「安全な空間」は、世代間で受け継がれる伝統的価値観が浸透することで、保守的で抑圧的な側面も持ちあわせる。

グライムズ家が通う教会は、空き店舗を改築して祭壇などを備え付けた簡素なもので、店頭教会と呼ばれる。店頭教会は、南部からの移住者とその子孫らが宗教的連帯を作り出すという点において、グリフィンが定義する「安全な空間」だと言える。このことは、トニ・モリスンが、都市論「都市の限界、村の価値」において、

ハーレムの施設や建物は黒人たちが築いたものではないが、そこに生きる同じ人種の人々が「氏族的な」関係を築くことで「喜びと保護」を感じられる「村」だと述べる点とも共通する（38）。20 世紀初頭の時代背景に目を向けると、店頭教会は、大移動によって南部農村部から北部の都市に移り住んだ黒人たちの精神的な拠り所だった。アビシニアンのように会員数が 1 万人を超えるハーレムの大教会は、牧師が会員のことを知らず、会員同士の交流も希薄であるため、「南部への帰郷」という思いのもとに、かつて慣れ親しんだ小規模な教会が求められていた（フレイザー 58）。つまり店頭教会では、黒人たちが歴史的経験やルーツを共有して人種的連帯を形成していたのである。

14 歳の誕生日に店頭教会の礼拝に参加したジョンは、この日の夜から翌朝にかけて宗教的覚醒を経験し、その様子を見守っていた年長の教会員からの祝福を受ける。覚醒に至るまでの一連の幻想の中で、ジョンは、父親に導かれながらニューヨークの狭い通りを歩き続けた後、ついに暗闇から抜け出して新しい人生の始まりを感じ、「われ、ジョンは、空中に都市を見た」（207）とヨハネの黙示録の一節を思い出す。ヨハネが流刑地であったパトモス島の洞窟で啓示を受けたように、ジョンが改宗によって見出した「都市」は、閉ざされた店頭教会にある「時間の外にある都市」（207）である。そしてこの作品は、翌朝教会を出たジョンが、「準備ができました・・・今から行きます」（225）と父親に言いながら帰宅する場面で終わる。この作品のタイトル候補のひとつは「私の父の家で（In My Father's House）」であったが、教会から父親の待つ家に帰る結末は、血のつながらない父親との関係を「安全な空間」と信じようとする私生児ジョンの健気さを印象づける。

10 年以上の歳月をかけて書かれた『山にのぼりて告げよ』には複数の構想メモが残されているが、物語の展開がほぼ固まった 1950 年時点のアウトラインを見ると、17 歳のジョンがハーレムの家と教会を去る場面までを描く構想だったようである。ジョンは「恐ろしく、禁じられた世界に自ら望んで真っ逆さまに落ち始める」とそこには書かれており、14 歳の改宗から 3 年後には新たな思いが芽生えたことがわかる。出版された作品では、ジョンがいずれ教会を去ることが冒頭部分の一節でわずかに暗示されるが、構想段階ではジョンが父親の意に反して旅立つ場面で終わることになっていた。

17 歳のボールドウィンがハーレムを去ったのは、この地区で生きることが作家としての自己実現につながらないと考えたからであり、グリニッジ・ビレッジで芸術家たちとの人種を越えた連帯に可能性を求めた。ジョンがのちに家と教会を去る理由は、出版された作品と構想段階のメモのいずれにおいても明示されていないが、これらから読み取れる内容を踏まえると、ジョンが父親との関係によって構築される「安全な空間」の欺瞞性を知り、ハーレムの外にある人生の可能性を求めようとしたと言える。父親の教えに従って神への忠誠を誓うジョンだが、彼らの間の心理的距離は縮まらず、ハーレムの家族や教会に自らを位置づけられないある種の「私生児」という状況に直面するのである。

しかしながらボールドウィンは、ジョンがいずれ幻滅することになる黒人教会の「安全な空間」の感覚を必ずしも否定的にとらえているわけではない。エッセイ「十字架のもとで」において、彼は「最も盲目的で生理的なレベルでは」教会で感じた「興奮」から「本当に醒めたことはないし、覚めることもないだろう」と述べて、「痛み」と「喜び」を分かち合いながら「教会と私が一体になった」瞬間を回顧する（306）。閉鎖的な空間で生まれる恍惚と人種的連帯の感覚は、たとえば彼の作品でよく描かれるブルースやジャズが引き起こす高揚感と同じように、都市に生きる黒人たちにたとえ一時的であっても救いをもたらしうるのである。

引用文献

Baldwin, James. "Autobiographical Notes." 1950. Baldwin, *Collected Essays*, pp. 5-9.

---. "Down at the Cross." 1963. Baldwin, *Collected Essays*, pp. 296-347.

---. *Go Tell It on the Mountain.* 1953. Vintage Books, 2013.

---. *James Baldwin: Collected Essays*. Library of America, 1998.

---. "Outline for the Novel." 1950. Ts. James Baldwin Papers, Box 12, Folder 3. Schomburg Center for Research in Black Culture Manuscripts, Archives, and Rare Books Division. New York Public Library, New York.

---. "The Harlem Ghetto." 1948. Baldwin, *Collected Essays*, pp. 42-53.

Frazier, E. Franklin. *The Negro Church in America*. Schocken Books, 1963.

Griffin, Farah Jasmine. *"Who Set You Flowin'?": The African-American Migration Narrative*. Oxford UP, 1995.

Lynch, Kevin. *The Image of the City*. MIT Press, 1960.

Morrison, Toni. "City Limits, Village Values: Concepts of the Neighborhood in Black Fiction." *Literature and the Urban Experience: Essays on the City and Literature*, edited by Michael C. Jaye and Ann Chalmers Watts, Rutgers UP, 1981, pp. 35-43.